
 卷頭言



「どうせ思考」

次長 齋藤 常修

「どうせ思考」と言われるものがある。

- 「(どうせ) オレは頭が悪いですよ。」 ○「(どうせ) 自分にできるはずがない。」
 ○「(どうせ) おまえは怠け者だ。」 ○「(どうせ) 教えてもムダだろう。」
 ○「いい成績とりたければ(どうせ、とれっこないが)、今すぐやったほうがいいよ。」
 わたしたちは、—そして、子供も—意外と「どうせ思考」に陥ることが多い。
 このどうせという思考は、いったい何が問題なのであろうか—。

子供の学ぶ意欲の基盤となる自信や誇りは、自分のよさやとりえに気づくことにより得られる感情である。新しい学習指導要領も、子供の関心や意欲などの内発的なものを大切に、それを支え伸ばす指導を目指している。もともと教育というものは、個人が自分の能力や個性を生かし、幸せを求めるとともに、社会に貢献できる人間存在となるように組織的・継続的に援助していく過程である。

ところが、ある意識調査(都内 小学校4～6年生男女の調査)の結果によると、「自分の気持ちを理解してくれる人」、「自分を賞賛してくれる人」としてあげられた教師の割合は、ともになんと3%に過ぎないというのである。(ちなみに、父母のその割合は、約70%、85%となっている。) どうやら子供は、教師から“理解されていない”“ほめられていない”とみており、そこでは、子供と教師の共感・信頼関係は極めてうすく、子供を「支え伸ば」して育てるといふ働きが、残念ながら弱いと言わざるをえないようである。

これは、どうも、「どうせ思考」と言われるふだんの思考・言動—冒頭の例文に代表される—の中に一因・遠因があるように思われてならない。

子供自身の「どうせ思考」は、自分のよさに気づき、能力・個性を生かすことにつながらず、将来の目標達成への意欲と努力を放棄することになる。一方、教師のそれは、子供の興味・関心や意欲を喚起・伸長させることはなく、また、子供の様々な能力や個性を生かすどころか、むしろ、それらを否定しその芽を摘み、未来への可能性を奪ってしまうことになる。

教師の「どうせ思考」は、子供にとってまことに迷惑至極なものなのである。

教師の「どうせ思考」の“転化したもの”(結果)が子供のそれではないか—もし、そうだとしたら、教師は二重の意味で罪作り(?)なのか、と考えるのである。
